

2026.05.31.

## 「神様との契約」

旧約 創世記 15 章 1～21 節

新約 マルコによる福音書 14 章 22～26 節

### 1. はじめに

5月の最後の主の日ですので旧約から御言葉を受けます。今朝は創世記 15 章、アブラハムの話です。アブラハムと妻のサラは 17 章（5 節、15 節）においてアブラムからアブラハム、サライからサラと名乗るように神様に命じられるのですが、混乱するのでアブラハムとサラでお話しします。創世記 12 章において神様からの召命を受けて、ハランを出発したアブラハムでした。この時アブラハムは 75 歳、妻のサラは 65 歳でした。アブラハム夫婦には子どもがおりませんでした。しかし神様は、アブラハムに「**あなたを大いなる国民にする**」（創世記 12:2）と約束しました。それからアブラハムは飢饉があったのでエジプトに逃れました（創世記 12:10 以下）。そして、再びカナン地方に戻ってきましたが、家畜が多くなりすぎたために、甥のロトと別れなければなりませんでした（13 章）。ロトは低地の肥沃な地域に行きましたが、そこで戦いに巻き込まれて家財・家族もろとも連れ去られてしまいます。そこでアブラハムは自分の奴隷達の中から 318 人を選び、そのロトとその家族や家畜を奪還しました（創世記 14 章）。このことから、既にアブラハムは相当豊かになっていたことが分かります。しかし、彼らに子どもは与えられていませんでした。今朝与えられている出来事は、16 章 3 節には「**カナン地方に住んでから 10 年後**」とありますから、それよりは前の事と考えられますので、アブラハムが 80 歳代前半のことと考えて良いでしょう。

### 2. 信じ切れないアブラム

15 章 1 節「**これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。『「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。』**」と始まります。アブラハムは神様の御言葉を信じて、故郷を離れてカナンの地に来たわけです。そして、10 年近くが過ぎましたが、彼らに子どもは与えられませんでした。ですから、彼の中で疑念が湧いてきてきても不思議ではありません。彼は神様の言葉を信じて新しい歩みを始めたし、歩み続けてきた。それは確かに神様の守りの中であった日々であったとも言えますけれども、約束されたことが成就したわけではありませんでした。「**大いなる国民にする**」という約束は、自分たちに子どもが与えられなければ、空手形になってしまう。そして、自分は 80 歳を超えた。妻のサラも 70 歳を超

えた。もう自分たちに子どもが与えられることはないだろう。そうアブラハムが考えても不思議ではありません。神様はそれをアブラハムの中に生じた「恐れ」と見て、「恐れるな」と告げられたのでしょ。私はあなたを守る、あなたは大きい報いを受ける、大丈夫だ。そう神様はアブラハムに告げられました。

アブラハムはこの神様の言葉に対して 2 節「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」と神様に応えます。更に 3 節で「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」と告げます。アブラハムが神様を信じられなくなっていたというのは言い過ぎでしょうか。でも、神様の約束の言葉を必ず実現する約束として受け止めることが出来なくなっていた。「神様、あなたは私を大いなる国民にすると約束され、私はそれを信じて故郷を離れました。それなのに、あれから 10 年近く経つのに私達には子どもが与えられません。もう、私達に子どもが与えられることはないでしょう。私の跡取りは僕であるダマスコのエリエゼルにしました。」そうアブラハムは神様に告げました。

このアブラハムの思いは私共にも分かります。信仰者として歩み始めたけれども、信じ切れない。神様なんて要らないとか、関係ないとまで思うわけではないけれど、神様の約束の言葉を信じ切れない。そんな歩みをしていた時期が、どの信仰者にもあるのではないのでしょうか。私にもあります。「神様は私共を愛しておられるし、全てをご存じで、私共に一番良い道を備えてくださる」と牧師は言うけれど、これが自分にとって一番良い道なのか？だったら、どうして試験に落ちる？会社が潰れる？家族や自分が病気になる？どうしてこんな目に遭わなければならないのか？私共は神様が自分のために備えてくださっている将来を知ることは出来ませんから、苦しいこと、困難なことがありますと、神様の愛と真実を信じられなくなってしまう。アブラハムもそうだったのだと思います。これは信仰の危機です。

### 3. 満天の星：聖なる体験

神様はこの時、アブラハムのそのような思いもちゃんとご存じだったのではないのでしょうか。それで神様はアブラハムに臨まれた。そして、神様はアブラハムにこう告げます。4 節「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」アブラハムが子どもは与えられないだろうと考えて、跡継ぎと予定した僕のエリエゼル。神様は彼が後を継ぐのではない。あなたの子が後を継ぐ。あなたには子が与えられる。そう明言されました。神様は、約束したことを反故にされることはありません。神様は真実な方ですし、全能の御力をお持ちです。しかし、アブラハムは信じられない。常識で考えれば、アブラハムは 80 歳を超え、妻のサラも 70 歳を超えています。

もう自分の子どもが生まれるはずがない。アブラハムはそう思った。しかし、神様は「そうではない」と告げられます。何故なら、神様は天地を造られた全能のお方だからです。アブラハムには不可能なこと、あり得ないことと思えることであっても、神様にとっては造作もないことでした。

そして神様は信じられないアブラハムを外に連れ出します。そして「『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』」(5節) 神様はアブラハムに満天の星を見上げさせます。アブラハムの目の前には、満天の星が輝いていました。この満天の星の光景は、宮崎の町から夜空を見上げても想像することも出来ないでしょう。皆さんはどれほどの満天の星を見たことがあるでしょうか。私は若い時に磐梯山の中腹から夜の空を見上げたことがあります。とても天気良くて雲一つない空でした。車のライトを消すと真っ暗でした。そして、天の川が本当にくっきりと川のように天上にありました。数え切れない星が空を埋め尽くして輝いていました。それはきれいというような光景ではありませんでした。まさに圧倒される光景でした。「天地を造られた神様」の御力、そしてこの方が何と大いなるお方であるかを思わされました。アブラハムにとって、この満天の星は私共とは違って珍しい光景ではなかったでしょう。しかし、改めてこの満天の星々を神様の言葉によって見上げ、「星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」と告げられ、更に「あなたの子孫はこのようになる。」と告げられた時、自分という存在が神様の大きさの前でなんと小さな者であるかを思わされ、神様に圧倒されたに違いありません。アブラハムは「自分に子ども与えられる」という所に、神様の御業を見ていたわけですが、満天の星を見て、神様の御業の大きさ、すごさを改めて思い知らされた。そして、ただただ圧倒された。神様が「あなたの子孫はこのようになる。」と告げられた神様の言葉を、神様の言葉、聖なる言葉、力と真実に裏打ちされた言葉として受け取ったのです。

「神様の言葉を神様の言葉として聞く」ということは、簡単なことではありません。聖書の言葉は神様の言葉ですが、聖書を読んでも簡単に神の言葉として受け取れるでしょうか。神様の言葉は、ただの言葉ではありません。神様の存在、ご人格と一つとなって私共に迫り、圧倒します。それは聖なる体験とでも呼ぶべき出来事です。私が牧師として献身するようにと召命を受けた時もそうでした。否定したり、断ったりする事なんて出来るものではありませんでした。ただ、ハイとしか言えない。それほどに圧倒的な力をもって迫ってくるものです。

この時のアブラハムもそうでした。聖書はただ「アブラムは主を信じた。」としか記していません。どうして彼は神様を信じたのか？神様の言葉を信じたのか？それは愚かな問いです。彼は神様が現臨され、その言葉を受け、圧倒的な聖なる存在に触れ、「あなたの子孫はこのようになる。」と告げられた神様の言葉を信じるしかなかった。この聖なる体験を言葉にして誰にでも分かるように説明することは出来ません。心理学的にアブラハムの心の動きを語ることもつまらないこと、無駄

なことでしょう。聖書はこのような出来事に満ちています。モーセやイザヤやエレミヤの召命の場面、イエス様の弟子たちが復活のイエス様と出会った場面、パウロの回心の場面等等。この聖なる出来事は聖書の核心的出来事です。キリストの教会は、この聖なる出来事ともに歩んできました。この聖なる出来事を語り、伝え、伝承してきました。礼拝も説教も聖餐もこの出来事によって支えられ、この出来事共にあります。

#### 4. 信仰の父（信じて義とされた）アブラハム

さて、主を信じたアブラハムは神様に義と認められました。「義と認められる」とは、神様がアブラハムを義（よし）とされたということです。アブラハムを裁きの対象としてではなく、正しい者としてお認めになり、神様との交わりに生きる者としてくださったということです。このことの故に、アブラハムは「信仰の父」として私共の信仰の父祖となりました。パウロがローマの信徒への手紙において「4:1 では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。4:2 もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。4:3 聖書には何と書いてありますか。『アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります。」と記しています。「信仰によって義とされる」という、ただ神様の憐れみによって救われるという恵みにアブラハムは与りました。神様がアブラハムに割礼が与えられるのはこの後、18章においてです。ですから、アブラハムは割礼を受けたから救われたのではなく、ただ神様の言葉、神様の約束を信じて義とされました。この「信仰によって義とされ」者として、私共の先頭に立っているのがアブラハムです。アブラハムこそが、最初に「信仰によって義とされた」ました。これが私共神の民であるキリスト者の父祖、アブラハムです。

#### 5. 神様との契約

アブラハムは「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましようか。」と神様に尋ねます。アブラハムは信じたのですけれど、その確証が欲しい。そう願った。神様はこのアブラハムの願いを退けたりされませんでした。そして、神様はアブラハムと契約をされました。9節以下「15:9 主は言われた。『三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。』 15:10 アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。」ここで雄牛と雄山羊と雄羊と山鳩が用意され、山鳩以外は頭から尻尾まで真っ二つに裂かれ、それが両脇に向かい合うように並べられます。山鳩は小さいので真っ二つに裂かれません。これは、当時の契約の仕方です。この真っ二つに裂かれた動物の間を契約する者が通る。それによって契約が

結ばれたことになります。当時の契約は、契約書にサインするなどというものではありません。この契約式は、もし自分がこの契約を破ったならば、自分はこの引き裂かれた動物と同じように引き裂かれても良いということを意味していました。絶対に破らない。文字通り命がけで結ばれる契約です。神様の契約とは、このように真実なものなのだということです。その真実さは、やがて神様が自らの独り子を十字架に架けてまでも守り抜く程のものだということです。

そして 17 節を見ますと「**日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。**」とあります。「煙を吐く炉」そして「燃える松明」は神様を示しています。つまり、神様が「**あなたの子孫にこの土地を与える**」(18 節以下) とアブラハムと契約したという事です。アブラハムには 80 歳を超えても子どもがいません。しかし、神様は改めてアブラハムと「あなたに子を与え、その子孫たは大なる国民となり、私はこの土地をその者たちに与える」と契約をされました。

## 6. 片務契約

ここで神様は引き裂かれた獣の間を通りましたが、アブラハムもその獣の間を通ったとは記されておりません。しかし、「**主はアブラムと契約を結ん**」(18 節) なのです。ここで注目すべきは、このアブラハムと神様との契約は「片務契約」であったということです。「片務」という字は、片方の「片」と、何かの役割を引き受けるという意味の「務」めるという字です。つまり、片務契約というのは、契約を結んだ者の一方にだけ責任がある、しなければならないことがある契約です。契約という者は、双方に為すべき事があるのが一般的な契約でしょう。それは双務契約と呼ばれます。一方は部屋を貸す。そして他方はその分賃貸料を支払う。これが私共の考える契約、双務契約です。しかし、ここで神様がアブラハムと結んだ契約は、神様が一方的にアブラハムの子孫にこの土地を与えると約束しているだけです。アブラハムはそのために何かをしなければならないとか、そのようなことは一切ありません。これは神様だけが引き裂かれた獣の間を通ったということと重ねて理解することも出来かもしれませんが、いずれにせよこの神様とアブラハムとの契約は、神様が一方的にアブラハムに「**あなたの子孫にこの土地を与える**」(18 節) と約束したものだということです。アブラハムにはそのために為さなければならないことは、何もありませんでした。アブラハムは「ただ信じるだけ」です。神様と私共との契約も同じです。私共はイエス様の救いに与るために、良いことをして、良い人になることなど求められていません。「そうならなければ救いませぬ」などと、神様は言われませぬ。神様はアブラハムと相對した時から現在に至るまで、救いの筋道、救いの御心においては少しも変わっていません。神様が私共を救ってくださるのは、ただ恵みによって、ただ信仰によってです。

## 7. 出エジプトの預言

最後に、神様がアブラハムと契約する時に告げられた言葉に触れておきましょう。13 節から「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。15:14 しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。」これは何を意味しているか、私共には分かります。イスラエルの民がエジプトにおいて 400 年間奴隷となり、それからモーセによってエジプトを脱出するということを告げているわけです。何百年の後のことです。アブラハムとサラはこの後、イサクを生み、イサクはヤコブを生み、ヤコブの 12 人の子ども達がイスラエル 12 部族の始まりとなります。そして、ヤコブと 12 人の子ども達、ヤコブの一族、イスラエルは飢饉の時にエジプトに移り住むわけです。そして、やがて奴隷となり、彼らの嘆きの声が神様の許に届き、アブラハムとの契約を覚えて、出エジプトの出来事を起こされたわけです。アブラハムはイサクのこともヤコブのことも全く知りませんでした。しかし、神様はイサク・ヤコブどころか、モーセもアロンも全て知っておられたということです。私共が神様と契約したということは、この全てをご存知である神様と契約を結んだということです。神様は本当に私を愛しているのかと言いたくなるような時もあるかも知れません。しかし、全てをご存知ある神様が、私共を天の御国へと導いてくださっています。そして、その救いの御業は私共の時代で完結するようなものではなくて、ずっと続いていきます。この教会が建てられて 100 年が過ぎました。ありがたいことです。しかし、この 100 年は 200 年、300 年とイエス様が再び来られる時まで続いていくことでしょう。私共は明日さえも分かりません。しかし、神様はご存知です。だから、案ずることはないのです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝もあなた様の御言葉を受けることが出来まして、感謝します。あなた様を信じます。不信仰な私共をお赦しください。あなた様は全てをご存知であり、全てを為すことがお出来になります。私共には出来ないこと、想像すら出来ないことであっても、あなた様にとっては容易なことです。そのあなた様の知恵と力によって守られて、私共は御国に向かって歩んでいます。どうか、私共の眼差しをしつかり御国に向けて、あなた様によって命じられたこの地上において為すべきことを、しつかり為していくことが出来ますように。あなた様の愛の御手の中で不信仰な私共を支えてくださり、いよいよあなた様を信じ、愛し、仕える者とならせてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン